

明治期沖縄情報と読者

——情報の広がりと引用と——

1 情報の流れ方、残り方、描き方

この夏、調査とシンポジウムでの報告を兼ねて沖縄を訪れていた。着いてまず行ったのは、沖縄国際大学での米軍ヘリの墜落現場だった。まだ異臭の残るその場所で、目撃証言を集める学生達から話を聞いたその翌日、「沖縄タイムス」に目取間俊が「地を読む、場所を読む」というタイトルで寄せているコメントが目を引いた。

朝日新聞と毎日新聞の一面トップは渡辺オーナーの辞任であり、米軍ヘリの墜落事故はその次の扱いでしかなかった。読売新聞は一面に載せてもいない。沖縄は今頃騒然とした状況なのだろうな、と思いつながら新宿の人混みを歩いていて、「忘れられた島」という言葉を思い出し、苛立ちとやりきれなさが募った。⁽¹⁾

目取間の指摘する通り、沖縄での報道メディアとの落差は、実際に見てみると甚だしいものがあつた。それとともに、ここでもう

和 田 敦 彦

一つ注意しておきたいのは、この引用に見られる「読み方」だ。つまり、目の前の新聞を読みながら、すぐさま別の場所で読んでいる読み手や、その場所の報道の仕方に思いをはせる「読み方」である。空間的な広がりの中で、単一ではない「読み手」の場所に問題意識を向けてゆくこと、これが本論での基本スタンスとなる。

この論でのねらいは、明治期の沖縄についての情報を空間的な広がりの中からとらえてゆくことである。読書、読み手の問題を、どのような情報が、どのような媒体で、互いに関係しあいながら流通していたのか、という「面」としての広がりの中で調べてゆく作業といつていいだろう。読者がどこにいるのか、という問いかけを、私としてはこうした問いとして受け止め、論じてゆきたい。

近代の沖縄についての認識は、言うまでもなく「日本」の領土や人種に対する認識の成立や変遷と深く関係しあっている。だが、このことはまた簡単な総括をも拒む複雑さをあわせもつてい

る。例えば小熊秀雄は、琉球処分における境界の確定作業を追いつながら、最終的に、「日本政府が琉球処分にさいしてとつた琉球観や歴史観はそのまま当時の日本の出版物にも流通していった」と述べる⁽²⁾。だが、そもそも「政府の琉球観」はどのように流通し、そしてどのように再生産されていったのかを検証する作業がなされない。こうした明治期における沖縄情報の広がり、あるいは近世以前との関係、明治期の諸科学の成立を背景としたその変容についての、あるいはその行方について、あまりにも多くの問題をなおざりにしてしまう。

いったいどのような領域で、どのような沖縄についての情報が、どのような文献を通して広がっていったのだろうか。あるいはそれはどのように変化していったのだろうか。

2 沖縄関連雑誌記事をめぐって

まずこうした基礎的な地点をこそ明らかにしてゆきたい。これまでも、「琉球新報」や「教育時論」をはじめとする沖縄の言論についての考察はなされてきたが、それをまなざす側、本土での沖縄情報の流れを、新聞、雑誌、書籍を中心として考えてゆきたい。今回は中でも特に雑誌論文を中心とした。明治期に、本土において沖縄について言及した雑誌論文を可能な限り収集、目録化し、分析してゆきたい。

また、その作業とあわせて、それぞれの雑誌記事における引用情報ともかわらせながら分析してゆく。引用文献の広がりとは、一面では読み手の知的な基盤、認識の地平を明かしてくれるが、

一方で、きわめて戦略的な行為でもある。後に見るように、知っていて、あえて引用しないケースや、都合よく特定の情報を利用するケースも当然出てくる。ここでは、先に述べた情報の広がりや一方で見やりながら、これら引用相互の間に生じる緊張関係や戦略を追い、そこに潜んでいる問題点をとりあげてゆきたい。

沖縄に関する雑誌記事の文獻目録については、既に先行するいくつかの労作があり、一九九四年度から九七年度にかけて行われた文部省科学研究費補助金重点領域研究「沖縄の歴史情報研究」における作業の中で、電子化、提供されてもいる⁽³⁾。加えて、それらに収められていない目録データや、各種電子媒体、オンラインで提供されているデータベースによる文献での補足を行い、これらのデータのうち、現在手に入れることができる文献をすべて集め、現物を自身で確認し得たもののみの正確な記事データを作成した。さらに、それぞれの論が言及、引用している文献をリスト化し、もとの記事データと相關した被引用文献目録を作成した。

むしろ、こうした作業は、いくつかの欠点をもっている。第一に、引用情報は必ずしも明記されるわけではない。明治期は新たな学の領域が成立してゆく時期であり、引用情報をどの程度明記するか、という慣習自体がしだいに作り上げられてゆく時期でもある。また、又引きのケースも当然あれば、単にタイトルのみを引用する事例もある。目録の作成にあたっては、単にタイトルがあげられるのではなく、実際に内容に対する具体的な言及、利用がなされているものを被引用文献としてリスト化した。とはいえ、明治期に実際に引用される情報の多くは、近世以前の文献で

あり、重版や再刻による異同も極めて多いにもかかわらず、どのテキストによったかは確定しがたい。また、沖繩に関する文献が引用されているのは、当然のことながら沖繩に関する論文ばかりではない。

したがって、たとえここでできるかぎり沖繩に関する雑誌記事を収集しているとはいえ、ここで明らかにしてゆく沖繩をめぐる情報の引用関係、そのつながりや広がり、あくまで限られた視点、素材によるものである。また、沖繩に関する明治期の新聞記事、書籍における情報も、論にあたつては適宜参照したが、それらとの相互関係については、別の場にて引き続き問題にしてゆくこととする。目録の全体については、ここでの掲載が紙幅上難しいので、別の場にその全体を「明治期沖繩関連文献、被引用文献目録」として掲載することとしたので、参照して頂きたい。⁽⁵⁾

3 情報の広がり、つながり

こうして集めた論は、総数としては三〇〇件程度である。この数は今後さらに確認される論によつて若干変動する可能性はあるが、大きく変動することはないと思う。総数自体がそれほど多くないため、総数の推移をここから早急にとらえるには難がある。

とはいえ、おおまかには明治二〇年代後半からしだいに雑誌記事として登場しはじめ、日清戦争から日露戦争前後にかけて高い件数を示し、明治末年にかけて漸減する傾向がうかがえる。もつとも掲載件数の多い雑誌は、順に「東京人類学会報告」(明一九・六創刊、後に「東京人類学会雑誌」へ)、「風俗画報」(明二二・二創刊、

「動物学雑誌」(明二二・一一創刊)となる。それ以外に比較的掲載数が多い雑誌としては、「地学雑誌」(明三二・一創刊)や「地質学雑誌」(明二六・一〇創刊)といった地学系雑誌の他、史学系の「史学会雑誌」(明三二・二創刊、後に「史学雑誌」)、「歴史地理」(明三一・一〇創刊、それに「文芸倶楽部」(明二八・一創刊)、「太陽」(明二八・一創刊)といった雑誌があげられる。

全体的な傾向としては、沖繩への関心は、漸増して大正期の南島に向けられた関心へと直結しているのではなく、一時期関心の落ち込みが見られる。これは台湾への関心の移行でもあり、更に言えば南の境界線の移行が反映しているよう。例えば雑誌「太陽」に掲載された原世外「沖繩の風俗」では、「九州地方を周遊し進んで台湾に到り而して帰途この沖繩の地に遊びし」といういわば「ついで」に立ち寄った地として記述されているし、森山吐虹「台湾航遊記」も沖繩にかなり言及はしているが、主要な関心は台湾に向けられている。実際に坪谷水哉は「台湾にでも行く序では是非一度は訪ふて見給へ」と、「序で」(ついで)として沖繩を引き合いに出している。⁽⁶⁾このことは、対沖繩経済政策から見れば、沖繩が「辺境」として、つまり「資本主義に包摂されていながら、同時に疎外されている関係」として場当たりの、消極的な対象として位置づけられてゆく過程ともなるだろうし、また、二度の戦争をはさんで皇民化政策が進む中、異質な境界線が抑圧(消失ではなく)されてゆく過程とも重なるだろう。

明治年間を通じて沖繩について多くの論が掲載され、また時期的にも早くから活動している場として、やはり「人類学会雑誌」

の果たした役割は大きい。坪井正五郎を中心にして一八八四年に設立されたこの学会は、やがて広範な領域の人々に広がってゆくこととなる。それはまた、人類学という「学」が、「日本人」というナショナルアイデンティティの形成に、いかに寄与していたのか、という問題をはらんでいよう。どこからどこまでが日本人なのか、という境界、さらには領土内の「日本人でない」存在を、いかに「非文明」なる存在として位置づけてゆくか、についての尺度が、どのように持ち込まれ、普及してゆくか、という問題である。むろんそうした文脈の中に沖縄がいかに利用されるか、という問いでもある。

しかしながら、ここで問題を日本における「人類学」に限定するのは間違いだろう。これまでにも、日本の人類学自体が、「旧幕臣あるいは幕府関係者とその師弟が多くを占め」ており、江戸以来の好古、古物趣味、研究ネットワークを色濃く残しつつ成立していたことが指摘されている。また、坂野徹は、坪井正五郎について「その政治性は、植民地統治の学、あるいは人種、民族をめぐる科学」という枠でとらえきれない複雑さがあることを指摘し、西洋の概念をずらし、好事化的に遊びに転化してゆく傾向をも見るべきことを述べている。⁽⁹⁾

とはいえ、確かに沖縄に対しては、その人種的同一性、皮膚の色、出土した土器、体毛といった要素から「測定」しようとする動向をやはり見て取ることができるだろう。これについては富山一郎が何度か言及しているが、そこには「日本人」と「琉球人」との同一性を見出すまなざしと、そう分類しつつも、そこにおさ

まり切らない要素を「未開」として、教化の対象として序列化するまなざしとが併存していることが指摘できよう。⁽¹⁰⁾

このことは坪井の弟子である鳥居龍蔵の人種論を軸に主張されているが、この鳥居や人類学会の言語が、近代の認識としての「広さ」をいかに獲得したかが問われねばならない。また、この指摘は単に人類学、あるいは鳥居という狭い領域の問題として受け止めるべきでもない。問題はこれらを相互につなぐルート、情報広がりのなのである。それをここではとりあげておきたい。

実際には初期の「人類学」は、かなり多様な領域が混在している場でもあった。一八八二年より八重山に渡り、それまでも多くの復命書を提出していた田代安定は、帝国大学からの委嘱で一八八七年に三度目の八重山調査に入り、「人類学雑誌」には数多くの寄稿が見られる。とはいえ、もともと尾張本草学の系譜を引く田中芳男のもとで植物学を学んだ経歴をもつ田代は、「植物学雑誌」の寄稿者でもあり、同時に「動物学雑誌」にはやくから沖縄の生物に関する報告を寄せる寄稿者でもあった。

「動物学雑誌」は、先にくれた黒岩恒の多くの沖縄関連の記事を含んでいる。そしてこの黒岩は沖縄に渡るにあたって、田代に助言をおいでもいるのだが、この黒岩は、「動物学雑誌」に八重山の動物を報告するばかりではなく、「沖縄島に就て」を「地質学雑誌」に、「尖閣列島探検記事」を「地学雑誌」に連載している。⁽¹²⁾ むろん、「東京人類学雑誌」にも数多くの記事を寄せているのは言うまでもない。つまり、人類学は、同時に地学、植物学、動物学といった様々な領域と結びあいながら、知的、人的

ネットワークを広く形成しており、ことは単に人類学といった領域のみの問題ではないのだ。「東京人類学雑誌」と地学系雑誌にまたがって沖縄について報告している例としては、他にも吉原重康の論があげられよう¹³⁾。

また、こうした専門雑誌以外の雑誌への広がりも注意すべきだ。先の鳥居龍蔵が、沖縄と内地での出土した土器の類似を指摘しながら「沖縄も、日本内地も最も古き時代に於ては同一の種に因て居住」する状況にあったとする指摘はよく知られているが、その論にしても、まったく同じ論を「人類学雑誌」と「太陽」¹⁴⁾に掲載することでより広範な雑誌に枝を広げている。さらに注意すべきは、あからさまな人種論の形をとらないが、その主張が潜在しているような言葉をもって、種々の領域の雑誌にその言葉を広げていつている点だろう。鳥居は、竹柏会の出す短歌雑誌「心の花」では八重山で集めてきた歌を素材に「日本民族が月に對し如何に謡つたと云ふ事がよく分る」と語り、雑誌「考古界」ではチェンバレンをひきつつ「日本語と琉球語とは相一致」¹⁵⁾すること¹⁶⁾を語っている。

むしろここに、人類学会の参加者であつて、同時に地学の領域で沖縄に関する論を書いてゆく山崎直方や、同じく早くからの参加者で沖縄の言語についての研究成果をあげてゆく田島利三郎らもとらえてゆくことができる。つまり、沖縄をめぐっては一見多様な人物、多様な雑誌がとりあげているように見えつつも、執筆者や素材、主張において相互に重なり合う形として、情報のつながりあつた空間としてとらえてゆくことができる。

また、坪井をはじめとする人類学会は、史学系の学会とも重なりをもっている。この歴史学における沖縄のとらえ方については、次節において、引用情報の分析を加えながら、そこにはまられる問題点を探つてゆきたい。

4 〈引用〉の行き交う場所

先にもふれたが、引用もまた、何を、どのように読んでいたか、という情報の広がりを追う有効な手だてとなる。ただ問題は、単に何を読んでいるかではなく、それを用いて何を主張しようとしているのか、という点だ。

すべての引用にわたつて論じることには無理なので、ここでは明治期において、様々な書からの引用によつて実証、反証の焦点となつていた地点の一つに焦点をあててみたい。それは、源為朝の伝説をめぐるものである。すなわち、保元の乱で伊豆大島に流された為朝が、後に沖縄に渡り、大里按司の妹と結ばれ、尊敬、すなわちのちの舜天王が生まれた、とする説についてである。

この説は、何を引用して証するか、とともに、この説自体をいかに利用するか、という政治的な文脈で歴史的な意味を近世以前から帯びてきている。村井章介はこの説を、琉球の島津への従属を正当化する「附庸神話」として位置づけつつ、原型としては一六世紀に登場していることを指摘し、琉球と往来していた五山僧から生まれた説ではないか、ととらえている。豊富な琉球情報をもち、「保元物語」の為朝鬼が島渡り説話を教養としても持つていた彼等の役割を、近世琉球体制の確立に重ねつつ問題化してい

る。¹⁷⁾そして、この説が幕藩体制下、琉球側において、辣腕の政治家である羽地朝秀（向象賢）に積極的に用いられることとなる。

ただし、為朝渡琉・舜天即位説は、薩摩・幕府に対する配慮という側面の方で、「中国の歴史認識に則ることによって、琉球を薩摩・幕府の属国に貶めることなく、独立国としてのアイデンティティ」を見いだしてゆく羽地の方策としてとらえる視点の必要性も一方で指摘されている。¹⁸⁾

近代において、この説はひとまずは領土的な正当性の根拠として用いられたことが知られている。すなわち一八七九年の日清間の交渉に際しての日本政府側文書「支那政府ノ抗論ニ対シテ我日本ニ琉球島ヲ占領スヘキ主権アルノ覚書」では、「中山伝信録」をひきつつ、先の為朝渡琉・舜天即位説を領土的根拠、すなわち沖繩が日本の領土であることを正当化する理由の一つとして用いる。¹⁹⁾この後明治期におけるこの説の行方を、それぞれの論の引用情報やその用い方に注意しながら追ってみよう。

そもそも風俗、言語、神話の類似から、琉球が日本に属するのは当然とする論は、「人類学雑誌」にも早くから見える。田代安定は一八九〇年（明²³⁾に「風俗言語等却テ支那ニ近似スルカ如ク誤認スルモノアリ」と注意しつつ、「言語ハ純然タル日本語」、「宗教ハ神道ノ一派」²⁰⁾と述べ日本の領土としての正当性を述べている。また、山下重民「沖繩は古来我が版図なり」は、こうしたあからさまな領土的文脈の中で「中山世譜」によりつつ、為朝渡琉を論に組み入れている。²¹⁾

ただ、領土的正当性の根拠としてこの説を用いていること自体

に無理があることは、既に一八九七年「史学雑誌」において、「我国人が琉球王たりし故を以て琉球は我に属せりといふは猶吾子をして他家を嗣かしめ是我分家なりといふの愚なるが如し、況んや為朝は我国の亡命者たるに於てをや」という形で明白に述べられている。²²⁾つまり自分の家の息子に他家をつがしておいて、自分の分家であることを主張するような屁理屈にすぎない、という批判である。ただしこの論は、それによって沖繩が自国の領土であることを覆す論旨ではなく、納税の有無、与えられた法令を奉じていたか、主治者の任命権は、といった観点から比較し、特に慶長以降の琉球を考えた場合、中国よりも日本に属するという結論に至る論旨ではあるが。

史学領域の雑誌や寄稿者は、したがってあからさまに領土の根拠としてそれを主張するよりも、様々な引用を引き合いに出しつつ、その説を事実として認定する役割の方を強く担ってゆくとと言えるだろう。一八八七年の九月に創設された帝国大学の史学科は、八九年に史学会を設立、「史学雑誌」の刊行をはじめ。そして「帝国大学国史科授業用ノ為メ」重野安繹や久米邦武らによつて編集され翌年出されるのが「国史眼」七冊である。「事蹟ノ正鵠ヲ確示シタルハ此書ノ右ニ出ルモノナシ」とするこのテキストの巻の三では、為朝渡琉・舜天即位は、史実として記されている。²³⁾ここでは特に根拠を用いていないが、「史学雑誌」に寄せられた「答問」欄に寄せられた読者の質問「源為朝琉種ニ下リ大島ニ移リ更ニ琉球ニ入り王統ヲ垂レタリトノ説アリ事実ニ候ヤ」に対して、史学会員平出鏗二郎は「中山伝信録」や「中山世譜」

の系譜を引きつつ「事実なるべし」としている。

また、こうした役割を大きく担ったのは幣原坦である。この説に肯定的な「南島沿革史論」⁽²⁵⁾としてまとめられる一連の彼の論考は、「史学雑誌」や「太陽」、「日本人」に一八九五年(明28)前後から掲載されはじめる。日琉同祖と琉球の日本に対する「恩義」と帰属を強調する史観に立っており、為朝渡琉を「最早隠れもなき事実と余は信ずるを以て、茲に委しくは云はず」としてそもそも議論を省いている。⁽²⁶⁾ 実際には一八九七年(明30)に田島利三郎に案内されながら、為朝のゆかりの地を次々めぐる時の幣原は「信憑するに足らざる口碑」、「また例の憶説」といった落差を地元の伝承からしばしば感じていた。⁽²⁷⁾

これに対して、一九〇三年(明治36)の論を皮切りに、そもそも引用のもととなる文献自体の疑わしさをとりあげ、反論してゆくのが加藤三吾である。この説を事実であるとする根拠となつてゐる史書自体作成年代が新しく、「世鑑は薩州人に見せるため、世譜は支那人に見せるため、球陽は其両者に基ついたものですから、到底何れも公平な記録ではありません」とする見方は、今日から見ても妥当な見解だろう。⁽²⁸⁾

加藤の見解への反論は、東恩納寛博が、また伊波普猷が行うわけだが、基本的にはそれは事実であることを証明するような反論というよりも、「中山伝信録」や「中山世譜」よりも古い文献にもこうした伝承が見られること、あるいは「口碑」として残つてゐること、という反論である。⁽²⁹⁾ にもかかわらず強力に彼等が加藤三吾を批判するのは、為朝を領土的な根拠としてよりも、沖縄の

側からの、日本との同一性の証としてとらえるスタンスにもよるだろう。とはいえ、史学系雑誌の周辺で活動していた東恩納や幣原坦は「事実」としては弱いことはある程度認識できていたはずだ。というのも、創刊以来の「史学雑誌」は、まさしくそうした俗説、史伝、神話を支持する人々の批判の中で活動してきているからだ。

重野安繹と同じく修史館出身の帝大史学科教授星野恒は「史学二対スル世評ニ就キテ」で、「小説的ナ歴史」や「勸善懲惡」を排して研究するスタンスが、「歴史学ヲ科学ト為シテ研究スルハ有害ナリ」といった世評に直面していることを述べている。また、日下寛は、「国史眼」に向けられた批判に言及しつつ「皇室に対して不敬とか、国典に違反」する「史学研究を蹂躪する」動きがあることを述べる。また、先の星野は「世情流布の史伝多く事実を誤る」と述べ、実証に基づかない英雄志向で歴史を解釈する当時の陸軍中将と、史学会員との間で生じていた論争に言及している。⁽³¹⁾

こうした、あくまで批判的な資料の検討と裏付けのある事実を尊重するスタンスが、史学科の教授久米邦武の「神道は祭典の古俗」をめぐる処分(一八九二年)、「史学会雑誌」の発禁といった事態へもつながつてゆく。⁽³²⁾

5 伝説をめぐる力学

為朝をめぐる文献の引用を検討するとき、むしろこうした公平なスタンスに立つて引用文献を批判的に見ようとしているのは、

史学科の東恩納よりも、沖繩の地で中学教員をつとめつつ手にはいるかぎりの資料を博搜し、島の老人とつれだつては言語や史料に広範な関心の目をむけている加藤の方だろう。また、実際にそうした評価を現在では受けてもいる。⁽³³⁾

こうした批判的な思考の手だてとしての「引用」を駆使する加藤だが、引用が行き交う場所に関して考えてゆくとき、彼についてはもう一つ示唆的なことがある。それは彼自身が、長い間あえて「引用されない」という特徴をもつこととなる点だ。このことについては既に数多くの言及があり、日琉同祖論と民俗学における南島研究との連なりの中で抑圧されていく思考のありかについても考えさせてくれる。

ただ、加藤三吾の評価について、一方で疑問を抱かないわけではない。それはなぜか。加藤は一八九九年（明治³²）沖繩県中学校に赴任するが、周知のごとく、一八九七年から、沖繩では（北海道と同じく）文部省によって地域向けの教科書が編纂されていた。その『沖繩県用尋常小学読本』では、巻六第一六課、一七課「源為朝」や巻七第四課「舜天」の項で、為朝渡琉・舜天即位が事実として記されている。⁽³⁵⁾彼の行った批判は、こうした、彼自身も加担している教育という場の言葉へは向かわない。教育から、「公平な」研究の場を切り離すことで成されている。自分自身が、まさしくその伝説を利用し、領土下におき、さらには皇民化、教化するために用いてきた本土の一人である、という認識には決して直面しない。そうした意識を切断することで初めて主張されている「公平な」言葉が、実際に領土下に暴力的にお

かれることとなった場の人々にどう読まれるか、を意識していたとは思えない。その「公平さ」を手放しで評価できないのはこうした理由からである。

ここでは、引用の行き交う議論の焦点となる場をとらえながら、それが単なる実証性以上の、様々な文脈に依存した戦略的な行為となつてゆく様を見てきた。そしてまた、引用する、あるいはあえてしないことによって隠される、あるいは都合良く利用される言葉の行方を追つてもきた。これら記事の広がり、その引用関係からは、単に認識の広がりや枠組みが見えてくるばかりか、様々な読み手が置かれている場の力関係も探つて行くことが可能なのである。

また、これら批判や論証の根拠としての引用の問題は、この為朝渡琉説自体が、いかに読まれ、用いられるか、いわば広い意味で「引用」（あるいは「再生産」）されてゆくか、という問題ともつながっていることも示してきた。この意味で、さらにもう一つ重要な為朝の「引用」、再生の動向についてふれておこう。それは、領土的な正当性のよりどころとしてこの説を引き合いにだすのでもなく、また沖繩と本土との同質性を強調するために引き合いに出すケースとも異なる。それは植民者、征服者としての憧憬の中でとらえるこの説を受け止める読み方である。⁽³⁶⁾ちょうど、内田魯庵「くれの廿八日」の主人公純之助が、地図の中米を凝視しつつ征服者、植民者の英雄的行程を夢想する姿にも重ねることのできよう。⁽³⁷⁾

そもそも為朝渡琉説を虚説と見なす見方は、別に加藤だけでは

ない。史学系の雑誌では一九〇八年（明41）の「歴史地理」で、坪井久馬三が、より古い『南甬文集』にまでその説をさかのぼるという伊波の反論を認めつつも「源義経が蝦夷落と類似したる雑説ならん」と加藤を支持している。また、この時期に沖繩を訪れた菊池幽芳は「為朝の琉球渡来説については、全然これを無する歴史家さへ少なくない」のに不満を述べてもおり、事実ではないとする見方もある程度共有されていたことがわかる。³⁹しかし、幽芳の『琉球と為朝』でより特徴的なのは「信じたい」という強い願望であり、訪れた場所や残っている古言を何かにつけて「為朝舜天の形見」として読む姿勢である。為朝以前に「我が天孫人種が南下して次第に琉球諸島の主人となった」という主従関係を背景とした人種観によりつつ、一人の具体的な植民者、征服者としてイメージし、その足跡を自分の足でたどることで自らと重ね合わせつつ夢想する。

この書は、翌年の児玉花外『源為朝』にしばしばひきあいに出版され、影響を与えているが、花外においては、より具体的な植民者像となっている。つまり、そこでは為朝は「我儘主義」の自由な人間として、「自由の新天地を開拓せんと欲して、万里の波濤を踏破した」人物として、「南洋蛮民」の中の「勇武なる海国男児」と記されるのである。⁴⁰

この時期については、「立志小説」あるいは「植民小説」といったジャンルの分析を通して、これまでも、海外植民への夢想をかき立てゆく小説群とその表現の広がりについて拙論において問題化してきた⁴¹。いわばこうした海外への植民といった

文脈の中で、より具体的に自らと重ね合わせ、夢想するような読み方の中で「信じたい」為朝像が引き合いに出され、再生産されていると見てよいのではないか。

こうした意味でこの時期注目したいのは一九〇二年（明35）の青々園伊原敏郎『為朝重太郎』だろう。明治期の時代設定で、海運業の親分である為朝重太郎が、監獄を脱獄してアメリカに渡ってゆく筋書きをこの小説はとっている。既にここでは一人の具体的な移民者として読まれることとなっているわけである。⁴²

ここでは、明治期の雑誌情報を手がかりに、沖繩をめぐる情報のつながり、広がり方をとらえ、さらにはそこでの引用の中にはらまれる緊張関係に焦点をあて、問題化してきた。読者がどこにいるのか、という問いかけを、こうした読む地点どうしの相互関係や、それらが互いに働きかける力関係の中で、情報の広がりとして問題化してきたわけである。目録化した資料の全体から見れば、ここでの考察は部分的なものにすぎない。こうした読みの場の広がりの中から、大正期の南島をめぐる情報との関係をも視野に入れながら、より詳細な考察が今後必要となろう。

注(1) 目取間俊「全国に突きつける時」『沖繩タイムス』二〇〇四・

九・二

(2) 小熊英二『日本人の境界』（一九九八・七、新曜社）

(3) 沖繩の歴史情報研究会（<http://www.okinawa.ac.jp/>）において、「沖繩歴史文献データベース」として公開（二〇〇四・九現在）。

(4) 例えば仲程昌徳「明治期における沖繩文学研究の動向」『琉球大

学法文学部紀要国文学論集」一九八七・三。

- (5) 和田敦彦「明治期沖繩関連雑誌文獻、被引用文獻目録」〔人文科学論集〕文化コミュニケーション学科編〕二〇〇五・三、信州大学人文学部、また、web上に利用可能なデータとして公開する予定がある (<http://fan.shinshu-u.ac.jp/weda/index.html>)。

- (6) 原世外「沖繩風俗」〔太陽〕一八九八・八、森山吐虹「台湾航遊記」〔太陽〕一九〇二・六、坪谷水哉「首里のご王城」〔ハガキ文学〕一九〇五・一)

- (7) 向井清史「沖繩経済史」(一九八八・五、日本経済評論社)

- (8) 坂野徹「日本人類学会の誕生」〔科学史研究〕一九九三・三)

- (9) 坂野徹「好事家の政治学」(思想)二〇〇〇・一)

- (10) 富山一郎「暴力の予感」(二〇〇二・六、岩波書店、同「測定という技法」〔江戸の思想〕一九九六・七)

- (11) 長谷部言人「田代安定氏に就いて」(田代安定「沖繩結繩考」(一九七七・二、ベリかん社)所収)

- (12) 黒岩恒「沖繩島に就て」〔地質学雑誌〕一八九四・四(七)、同「尖閣列島探検記事」〔地学雑誌〕一九〇〇・八・九)

- (13) 吉原重康「琉球旅行の覚へ書き」〔東京人類学会雑誌〕一九〇〇・五・同「琉球島旅行話」〔地学雑誌〕一九〇〇・八

- (14) 島居龍蔵「沖繩諸島に住居せし先住人民に就て」〔太陽〕一九〇五・一は翌月同タイトル、ほぼ同じ内容で「東京人類学雑誌」(一九〇五・二)に掲載される。

- (15) 島居龍蔵「俚歌童謡」〔心の花〕一九〇五・三)

- (16) 島居龍蔵「沖繩諸島の先住民に就いて」〔考古界〕一九〇五・二)

- (17) 村井章介「東アジア往還」(一九九五・三、朝日新聞社)

- (18) 渡辺匡一「為朝渡琉譚のゆくえ」〔日本文学〕二〇〇一・二)

- (19) 同注(3)

- (20) 田代安定は「沖繩県八重山列島見聞余録」〔東京人類学会雑誌〕一八九〇・七、及び「薩南諸島ノ風俗余事二就テ(続)」〔東京人

類学会雑誌〕一八九〇・一二)において、領土性を強く帯びた主張を行っている。

- (21) 山下重民「沖繩は古来我が版図なり」〔風俗画報〕一八九六・六)

- (22) 菊池謙二郎「琉球が本邦及び支那に對せし關係を論ず」〔史学雑誌〕一八九六・九(一〇)

- (23) 重野安綱・久米邦武・星野恒編「稿本 国史眼」(二八九〇・一二、大成館)。なお、引用した文は「史学雑誌」掲載の「国史眼」広告に見られる。

- (24) 平出鏗二郎「答問」〔史学雑誌〕一八九三・五)

- (25) 幣原坦「南島沿革史論」(二八九九・六、富山房)

- (26) 幣原坦「南島に於ける源平氏の遺跡」〔太陽〕一八九六・一二)

- (27) 幣原坦「南遊史話(承前)」〔史学雑誌〕一八九七・二)

- (28) 加藤三吾「琉球雜記(2)」〔東京人類学会雑誌〕一九〇三・一)

- (29) この論争の詳細な経緯に関しては、島倉竜治・真境名安興著「沖繩一千年史」(一九三三・六、小澤書店)が詳しい。

- (30) 星野恒「史学ニ対スル世評二就キテ」〔史学雑誌〕一八九三・二)

- (31) 星野恒「本邦ノ人種言語ニ付郵考ヲ述テ世ノ真心愛国者ニ質ス」〔史学会雑誌〕一八九〇・一〇)

- (32) 久米邦武「神道は祭天の故俗」〔史学会雑誌〕一八九一・一〇・一二)。永原慶二「20世紀日本の歴史学」(吉川弘文館、二〇〇三・三)は、これを機に日本史学界の主流が実証主義というスタンスをとりつつも、現実と向き合う姿勢を弱めていったととらえる。

- (33) 早川孝太郎「本書の上梓について」(加藤三吾「琉球の研究」(一九四一・一〇、文一路社)所収、及び野口武徳「南島研究の歲月」(一九八〇・八、東海大学出版会)を参照。

- (34) 外崎克久「北の旅人」(一九八二・八、御茶の水書房)や、前掲早川の文を参照。

- (35) 文部省「沖繩県用尋常小学読本巻六、七」〔引地正編「地域教育

資料3 沖縄県用尋常小学読本」(一九八四・三、文化評論社) 所収

- (36) 小峯和明「琉球文学と琉球をめぐる文学」(『日本文学』二〇〇四・四)における「侵略文学」という枠組みがここでも有効となるだろう。

- (37) 内田魯庵「くれの廿八日」(『新著月刊』一八九八・三)

- (38) 坪井九馬三「源為朝琉球入に就ての最旧説」(『歴史地理』一九〇八・一)

- (39) 菊池幽芳「琉球と為朝」(一九〇八・五、文禄堂書店)

- (40) 児玉花外「史伝小説源為朝」(一九一〇・一一、河野成光館書店)

- (41) 和田敦彦「メディアの中の読者」(二〇〇二・五、ひつじ書房) 第三章を参照。

- (42) 伊原敏郎「実事小説為朝重太郎」(前編一九〇二・三、後編一九〇二・四、駁々堂)

〔付記〕本稿は琉球の会(二〇〇四・九、於琉球大学)での報告に基づく。その際、小峯和明氏をはじめ、会の方々から貴重なアドバイスを頂いた。また、渡辺匡一氏からも、論の内容について示唆を頂いた。この場を借りて、御礼申し上げたい。

新刊紹介

石原千秋著

『漱石と三人の読者』

(講談社現代新書 1743)

本書は、朝日新聞入社後の漱石が小説というジャンルに対し行った実験と格闘を書き手側の読者意識と結びつけて論じている。

「三人の読者」とは書き手から見た読者の種類を指し、一人目は具体的な何人かの個人、二人目は著作を発表するメディアが対象としている多くの読者、三人目は読むことを予想されていない人々という区分である。それらが複雑に絡み合った「錯綜体」が書き手にとっての読者であり、漱石の創作の過程はそのような複数の読者との関わりの軌跡であると捉え直される。また、その小説は異なる読者像へ向けて書き

分けられていると著者は論じ、「三四郎」その他を用いて小説の中に構造化され組み込まれている複数の読者の姿が明らかにされるのである。

漱石の実験は未来の読者へも企てられていることから「なぜ漱石を読むのか」という問いへの一つの回答を与えてくれる画期的な試みである。

(二〇〇四年一〇月 講談社 新書判 二五二頁 税込七十七円) [伊藤優子]